

ミシエル・トゥルニエ

『フライデーあるいは太平洋の冥界』

中村弓子

フランス文学はあくまで人間臭い。もちろんその中にも自然が大きな位置を占める作品がないわけではない。例えばバルザックの『谷間の百合』におけるアンドル河、そしてモーリヤックの『テレーズ・デスケルー』におけるランド地方の松林など。しかしそこで自然は登場人物の内面と緻密に照応しあうものとして、究極のところは内面にくりこまれるべく描かれている。「女性のなかの花ともいふべきあのひとが、この世のどこかに住んでいるとすれば、それはきっとここだ、ここにちがいはない」と『谷間』の主人公フェリックスは叫び、『テレーズ』は夫に向かって言う。「私はこの荒れはてた土地にかたどってつくられた人間です。渡り鳥と、野猪以外に生きているものがない土地が私の姿です。」

ところが、自然が人間と根本的に異質なものとしてその裸の姿を顕し、むしろ自然のほうが次第に人間を変貌させてゆくという話が現代のフランス文学の中に現れた。森林の羊歯、椰子、月桂樹、空に舞う秃鷹、岩場の蛸、亀——自然に親しむ季節でもある夏休み

の読書にふさわしい本としてご紹介するのは、ヌーヴォー・ロマン以後の現代フランス文学の雄ミシエル・トゥルニエ作『フライデーあるいは太平洋の冥界』（岩波現代選書）である。

この小説はデフォーのあのあまりにも有名なロビンソン・クルーソー物語のパロディーでもある。本来ロビンソン物語とは、人間の（そしてまた西洋的）合理性の秩序をもって自然の無秩序を制御する、という話である。そしてこの小説の主人公もまずはロビンソンらしく、島の

自然を管理しようとする。しかし両者の葛藤のすえ、この小説ではそれが逆転されてしまう。

小説の冒頭に非常に象徴的な場面がある。島に打ち上げられた主人公はジャングルを偵察しに入ってゆく。「枯れて腐った木の幹が折り重なって山をなしていたので、ロビンソンはあるときは植物のトンネルの下を這い、またあるときは自然の歩道橋の上を歩くように数メートルの地面を進んでいった。」真直ぐ道を進むことができず「トンネルの下を這ったり」「歩道橋の上を歩」かざるをえないのは、裸の自然にぶつかって西洋的合理精神そのものごとくである。そのあとロビンソンは行く手に異様な格好の根株を見つける。しかし森の緑の薄明りの中でそれは少しずつ、毛の長い野生の山羊に変貌する。じっと動かないこの山羊をロビンソンは恐怖心からやみくもに殺してしまうのだが、合理的認識というものとの問い直しを大きなテーマとするこの小説において、結局ロビンソンの眼に山羊は再び根株に戻ってゆくのだと言えるだろう。そしてロビンソンはそうしたありのままのものとしての自然と合体する。

すべて異質なものととの合体とは広い意味で愛である。

だからこの小説は合理主義の問い直しの小説であると同時に愛の小説となっている。

小説のプロローグ、嵐で横揺れするヴァージニア号の船室で船長がタロット・カードを使ってロビンソンの未来を占う。出たカードを講釈したあと船長は、この占いは一種の暗号であり、ロビンソンの「生活」の実際の出来事がそれを解読するだろう、と言う。しかし『フライデー』というこの小説そのものが一つの新たな寓話として読者の「生活」に投げかけた暗号となりえている。その暗号の射程は非常に広い。合理主義精神に対立する自然、というのがその読み取り方の一つである。——ところで我われ大人にとっての子供の世界とはいったい何だろうか。それはもう一人のロビンソンの前に拡がるもう一つの野生の島ではないだろうか。『幼児の教育』誌の読者の方々にこの本をご紹介する本当の理由はそこにある。

(お茶の水女子大学)